
Last witch

神崎ミア

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last witch

【Nコード】

N7619V

【作者名】

神崎ミア

【あらすじ】

仮想都市ビライドは特殊能力を持った人間の進化種、ミュータントを中心とした4種族からなる世界。その一番古い種族である魔女の血を引く少女、シエリル・バウスフィールドは祖母である古の魔女、エミリアからその魔術の叡智すべてを受け継いだ最後の魔女だった。彼女の持つ叡智を求める者、その対立の先に待つ彼女の運命とは…。

プロローグ

大お祖母様のお言いつけ、みだりに人前で力を使つてはいけない。その力はこの世界の根底を乱し、争いを生み、命を奪うもの。決して誰かを救うための力ではないということ。身に余る強大な力は、自分を滅ぼすということ。私はそれを16年間心に刻んで生きてきた。

Last witch

空中に浮かぶ都市、ビライド。その都市は四つの種族からなる世界。まずビライドの頂点に君臨するのは人間の進化種であるミュータントと呼ばれる種族。姿、形、全ては人間と差異なく、彼らは人間ならざる力を持っている。時に念力であったり、時に時空移動であったり。

そうしたミュータントがこのビライドの力では一番上の存在で、ミュータントであれば政治家などに優遇されることがある。

次に古の血族と呼ばれる種族。彼らはたった一人の魔女、エミリア・オルブライトから枝分かれした血を別けた種族。しかしながら混血も存在し、彼女が広めた魔術を人間に教えた者もいたため、彼女が指し示した古の文字が解読できるものをそう呼ぶ。

その次に人間。特にたる能力も持たないが、その高い頭脳を生かし、技術開発、医療などの前面を担っている。また軍人もミュータントに比べて人間が多い。そして数はミュータントの倍以上はいる、ありふれた種族だ。

最後に、ミュータントとしての能力を限界まで引き出し、既に人型を保てなくなった劣悪種。主に能力の異常変異が原因の為、ミュータントから劣悪種が生まれることも少なくない。そして彼らは殆ど自我を失っており、もはや人間ですらない。しかしながら年々その数を増やし、ビライドの街を闊歩し、危害を加えているようなら駆除されている害獣にすぎない。

そんな四つの種族が互いにより干渉しあうことなく、己が能力をそれなりに使って助け合いながら生きているのが、この空中都市、ビライドなのだ。

シェリル・バウスフィールドは孤独な少女だった。

彼女の母親は彼女が生まれたばかりの頃に病気で他界し、唯一の父と、祖母は数年前、とある事件によって命を落としてしまい、彼女は一度に天涯孤独と成り果てた。

しかしながら、彼女の両親、そしてその家系は古の血族であり、ビライドでは優位種族であるため、彼女の生活に不自由はなかった。決まった時間に起床し、一人つきりでは広すぎる豪邸から出て学園に通い、適当に授業をやりすごしては再び帰宅し、このサイクルを続けている。

彼女の従者である青年、カルクは彼女の鞆を静かに差し出して机に頬杖つく彼女を見つめた。不機嫌だ。そう思った。

「いかなさいましたか、お嬢様」
「もしかして…忘れてないわよね？」

念を押すように、分かっているだろうというように尋ねられた言葉に、カルクはすぐに何を指しているのか気がついて頷く。明日は彼女の17回目の誕生日なのだ。

シェリルはカルクから渡された鞆に頸をのせ、大げさにため息をついた。この屋敷で働いているのはこの従者の青年カルク、執事のアレクシス、メイドが三人、家庭教師の老人が一人。計6人となる。彼女には目立った友達もいないため、毎年の誕生日は憂鬱だった。シェリルの両親がまだ存命だった頃は、沢山の従者が住むにぎやかな屋敷だったのだが、父と祖母の死から、シェリルは自らの選択でこの6人以外を解雇してしまったのだ。自業自得といえそうである。

「…でも、いいわ…。明日学園の委員作業があるもの…遅くなるし」
「ではせめてご夕食だけでも華やかにさせて頂きますよ、お嬢様！」
「わがまま言っただわ、ごめんなさい。ちょっと構ってもらいたかっただけだから別に気を遣わなくていいわ」

カルクは内心、彼女を不憫に感じていた。

カルクはこの屋敷に、身寄りがなかった少年時代この屋敷の主である彼女の父に拾われて住み込みで働くことになったのだ。彼女の父に恩があり、また彼も父親同様慕っていたためその死から三年経った今でも受け入れられずにはいた。まるで自分の心境を重ね合わせるように、カルクはシェリルを見つめているのだ。一度大きく首を振り、カルクはそんな考えを跳ね除ける。

「…朝食、今持って参ります。ご夕食の事も私がしたくてすることです…」

「そう、…なら任せるわ」

言葉と共に溢れ出たため息は、ダイニングに反響してすぐに掻き消えた。カルクは一度礼をして、その場を後にする。

シェリルは誰もいなくなつたダイニングで窓の外に鳥が羽ばたく様子をじっと見つめて指先を動かす。小さな音と共に窓が独りでに開いて、やんわりと冷たい風が室内に流れ込んだ。

「おばあさま…、私はあなたが亡くなつただなんて…まだ、信じられません…」

シェリルは一度、背を向けていたダイニングの肖像画に振り返る。美しい笑みを湛えた女性が描かれている。

彼女こそ古の血族の創始者、エミリア・オルブライトである。

指先に込めた魔法の粒と、その肖像画を見つめながらシェリルは目を閉じた。今でも鮮明に残る、祖母の姿を。

第一章 魔女狩り

シェリルの日常は、17年間変わったことがなかった。しかしそれは祖母と父が亡くなる三年前からじわりじわりと変わりつつあり、その原因の一番は祖母が亡くなったこと。つまり、シェリルの安寧は祖母であるエミリアによって守られていたということだ。

屋敷に一人きりとなつてからは、父の兄やら、母の妹の娘やら、見たことも会ったこともない親戚が押し寄せては、どうだろうか、一緒に住まないだろうかと優しい声を掛けてゆく。

そしてシェリルはその旅、その言葉の背後に遺産を見つめる視線を感じて首を振ってきた。

シェリルが住まうバウスフィールド邸には、まだ成人もしていない少女が抱えるには大きすぎるほどの莫大な遺産の他に、祖母が残した叡智の断片と呼ばれる魔術書が残されている。

古代文字を解読ができる古の血族の中でも、本当に濃い血を別けた者だけが解読することができると言われる、黄金にも代えられない大切なものだ。勿論シェリルは叡智の断片の全てを把握している。

幼い頃より、シェリルはエミリアから教育を受け、その才能が相まってか魔術は自由にその小さな手の平に操られていた。

エミリアはミュータントがこの世界を統べる前に、シェリルにこんなことを言った。

「シェリル、この世界には新しい何かが生まれる。それはお前にとって良くも悪くも必ず関わってゆくだろう、お前はお前の意志でこの叡智を求め、使役なさい。ただそれが正しいことなのか、よく考

えることだ」

シェリルはその意味をしつかりと理解してはいなかったが、祖母が言うことは必ず頷き心に留めた。

そうして今、祖母がいない世界でその意味を改めて考えるのだ。

「シェリル」

屋敷から出て、学校へ向かうシェリルを止める声があった。

シェリルは声に反応して一度足を止めたが、また再び歩き出して振り返ることはしない。

声を掛けた男は尚も、シェリルの名を呼んだ。

「おいシェリル、シェリル！」

「…何の用です叔父様」

赤茶をした髪があらゆる方向に好き勝手はねていて、身を包むその服装は質素。よれよれのシャツに僅かにシミが滲んでいる。脇には今朝の新聞を抱えて、片手を大きく振りながらシェリルの後を追う。

「はは、足が速いな、おじさんついてだけで息が切れちゃう」

「……お金が必要なんですな」

「…いや、参った参った…」

シェリルは深くため息をつき、叔父である背後の男にようやく振り返った。

「一体いつまで私につきまとうんですロイズ叔父様。お金が必要な

らお仕事してらしているんですからご自分でまかなって下さい、独身なのですし」

「やあ、シャルロット。おじさんこう見えて借金しているんだ、お金ないんだよお」

「こう見えてもどう見えてもそんなことは一目瞭然ですが、あなたの借金を払ってやるほど、バウスフィールド家は甘くありません、どうぞお引取りください」

ツンとした態度を貫き、その一言だけ返すとタクシーを拾おうかとシェリルは辺りを伺った。ふとそんな何気なく遣った視線の先、見慣れた黒のフード姿の人物を二人見つけ、シェリルは一瞬、息を止めた。

（ブラックファイア…！）

どうやらシェリルの家を捜しているらしい。きよろきよろと落ち着き無く視線を遣る二人組。その服には大きく、炎を象った紋様が描かれている。ブラックファイア、魔術を粛清するミュータントで構成された組織。シェリルはすぐさま叔父であるロイズの首根っこを引っ張って屋敷に逆戻りした。

「な、なんだいシェリル。もしかして…おじさんにお金借してくれるのー？」

「馬鹿言わないで下さい、ブラックファイアが屋敷を見張っていたんです」

幸い、この屋敷にははっきりとした血族でなければ入れない特殊な魔法がエミリアによって施されている為、いくら超現象が起こせるミュータントといえど目にするにすることすらできない。

「ブラックファイア…」

「まさかあなたの差し金じゃあないですよね？」

「ははは、おじさん信用ないなあ」

「…当然です」

諦めたのか、姿を消した二人組みに安堵の息をつき、シェリルはゆっくりと立ち上がる。

「ブラックファイア…面倒な組織…」

二話

「エリア七千六百地点、午前、十時と十二分七秒。ターゲット、見失いました」

「なーんだかなあ」

シエリルの邸宅から少し離れた屋外。黒衣を纏った二人組みが辺りを見渡していた。その片方は通信機で連絡を取り、もう片方は腕を組み、諦めているかのような口調で呟いた。

「古の魔女はもう死んでるんだしさあ、こんなに血眼になることないじゃん？アタシさあ、別にやりたくてこんなことしてるわけじゃないしい」

「通信、終了しました。任務失敗、ただちに帰還姿勢を取るべきかと」

「…はあ、アンタとアタシじゃまともな会話もできないし」

通信機を切った片方の女は、悪態をつく少女を一瞥して手のひらを大きく地面へとかざした。

すると地面に突然黒い弧が描かれ、その黒い弧にきれいに重なるように深く暗い穴が突如出現する。少女の方は気に食わない様子で女を見つめていたが、やがて何を言うでもなくその穴に飛び込んでゆき、女も続いて穴へと飛び込む。

女のフードが完全に漆黒へと飲まれると、穴はあつという間に地面へと戻り、何事も無かったようにその場所にはずっと風が吹き抜けていった。

その後、ブラックファイアの動向を暫く伺っていたシェリルはもう完全に人影が無くなったのを確認して屋敷から数歩歩き出す。背後に張り付いていたロイズはそんなシェリルの横顔を見つめてまるで自分が危ない目に遭ったかのように小さく安堵のため息をついた。

「いやあ危なかったね、シェリル。オジさんドキドキしちゃった」
「あなたのお陰でつまらない時間を過ごしてしまいました」

そう悪態をつきつつ、シェリルは胸元から小切手を取り出し自分のサインを素早く書くど押し付けるようにロイズに突きつけ、髪を払った。

ロイズは小切手を落とさないようにしっかりと両手に抱え、シェリルを見遣る。

「それだけあれば借金も返せてしばらく生活もできるでしょう。失業しているわけではないのですから、これ以上バウスフィールド家には関わらないで下さいますか」

「こんなに大金…なあシェリル俺はお前を」
「それでは私はこれで失礼します」

ロイズの一言を、既に悟っているかのように、はたまた聞く気が全くないように、シェリルは自分の言葉でかき消して歩き出した。付いて来られるのが面倒だと感じたのか、小さく唇を動かして言葉を

口にすると、ずっとシェリルの体は霧散してしまい、ロイズは伸ばした手のありかを探すように一度拳を握り、深くため息を吐き出した。

彼女の周りには常々、彼女の財産を求めて親戚と一緒に住むことを進言している。

魔術の全てを把握しているだけあつてか、賢い彼女は全くそれらの言葉を信用することなく、指先でつま弾くように親戚たちを跳ね除け、一人、彼女には広すぎる豪邸で暮らしている。

ロイズは全く信用のない自分が、彼女と暮らしたいと口にすることがどれほど浅ましく見えるかを考え、冷たく接する彼女に心を痛めていた。

手のひらに握らされた小切手に力を込め、ロイズは項垂れる。

彼女と暮らしたいという気持ちに下心がないにせよ、その手に握られた大金は結局の所、彼女を裏切っているのだ。

ロイズはシェリルの邸宅を眺め、背中を丸めて歩き出す。 出社時刻はとつくに過ぎていた。

学校に着いたシェリルは、誰も自分が突然この場に現れた所を見ていないか確認をし、平静を装ってまるで歩いてきたかのように門まで悠然と歩いていった。

彼女は自分が魔術を使える古の種族であることを公言せず、極力魔法は使わないように祖母に言いつけられていた。

先ほどのブラックファイアがいつ何時、魔術を使える者を狙うとも分らないし、魔術は多かれ少なかれ、人を不幸に陥れるように出来ている、そう教わっているのだ。

ミュータントの特殊能力と違い、代償がいる力であること。その代償は自ら望んだものになるとは限らないことをきつく言われているのだ。

シェリルが玄関口まで歩いて行くと、ふと、人ごみが出来ているのに気がつき、歩みをゆっくりとした速度に変え、やがて立ち止まる。人ごみの真ん中の人物は、エントランスのど真ん中で一段、階段に足を掛けて何かを語っている。

普段こう言ったアクセントなどに首を突っ込みたがらないシェリルではあったが、場所が場所な為、足止めされて聞き入れれば、すぐにその場に居なければならぬとすら思える理由となった。エントランスの真ん中で両手を広げている少女は、高らかに宣言する。

「私はこのビライドの優劣に疑問を抱きます。この世界で一番の能を持つのは古の種族、つまり魔術という至高の叡智を物にする者。この私がそうであるように」

シェリルは耳を疑う。彼女は一体何をのたまっているのか。一瞬停止した思考回路は彼女の存在を脳内から叩き出す。勿論、親類ではない。魔術の叡智を把握できる伝えられたもの、シェリルは苦い表情をして彼女を見つめる。

どよめく観衆はそれぞれの思いを口で、あるいは胸で呟きながらただ一点、古の種族と自称する少女を啞然として見つめるのであった。そう、シェリルと同じように…。

三話

「何をしているんだ、サラ・エイブリッジ！」

人ごみを掻き分け、教師の一人がエントランスの中央で政治家よろしく持論を並び立てていた少女に近づく。少女、サラは教師に振り返り、つまらなさそうに愛想笑いを返した。

「何を？私は言いたい事を述べていただけです、先生。もう教室に戻りますわ」

「いい、お前は私についてくるんだ、聞きたい事がある」

「構いませんよ」

どうやらサラの演説は終わったということを感じたのか、人はまばらに散り始めていた。一体先の演説は何だったのか。シェリルは彼女を意図を探るように暫く、その場で考え込んでいたがやがて彼女の姿も見えなくなると、ため息を一つ。自分も教室へと戻る為歩き出した。

魔術は人に混乱を及ぼす。サラはどれほどの使い手なのだろうか。

本来魔術はエミリアの親族へ与えられた唯一の力。

特殊な文字で構成された詠唱を元に、様々なこの世の原理へ命令を下し、捻じ曲げる異能の力。

何も無いところから炎を出したり、指先一つで物を動かしたり、体を霧散させてしまう、というのも彼女の言葉が操っているもの。つまり命令。

この命令が正しく出来なければ、従わせることができず、術者はペナルティーを与えられてしまう。

つまり、彼女はこのブライド全ての理を動かすことが出来る唯一の者であるということ。

彼女の他にこれを出来るものは既にこの世におらず、以下は上位魔術師、下位魔術師と呼ばれている。

彼女の親族、はたまた彼女の親族が他の誰かに解読方法を伝えた者が自分の技量に合った術を生活や用途に合わせて使役しているのだ。

もし彼女が誤った使い方をすれば、ミュータントの末路、劣悪種という最悪の事態を招きかねない。

シェリルは不安が残る気持ちで彼女のいたエントランスにそっと振り返るのだった。

放課後。シェリルは学校に親しい者がいないため、クラブにも所属しておらず。自分のロッカーから課題と着替えをまとめ、帰宅するべく準備をしていると、背後から急に声を掛けられて手を止める。ロッカーの鏡で確認した姿に、シェリルは一瞬、息を止めて振り返った。

「何かしら？」

「あなた、シェリル・バウスフィールドさん？」

背後に居たのは、サラだった。

ウェーブのかかったツインテールが軽く揺れて、彼女は端正な顔に綺麗な笑みを浮かべる。まさか向こうから接触してくると思っていたい

なかったシェリルは、出来るだけ平静を装い、彼女の次の言葉を待った。

「初めまして、私、サラ・エイブリッジ。あなたが同じ学年で唯一クラブに入っていないって聞いたからちよつと声掛けてみたの。どう、これから少しお話ししない？」

「…ええ、構わないわ…特に用事はないから」

シェリルはロッカーを閉め、強張った表情で笑みを返す。それは見る人が見れば動揺だと気づいたかもしれない。サラがそれに気づいたのかは分からなかったが、彼女は一言、嬉しいわ、と変わらぬ笑みをシェリルに見せる。その美しい笑顔に、シェリルは少し寒気すら感じて首を振った。

聞き出すことはもう決まっている。カルクに申し訳ないと思いつつも、踵を返した彼女の背中を睨みつけるようにして、その後続き、シェリルは学校を出た。

サラが案内したカフェは落ち着いた雰囲気のお店だった。

学校から近いためか、ぼつぼつと同じ学校の生徒の姿が見られたが、サラは他の生徒たちから一番遠い席を選んで座り、シェリルが座ったのを見てにつこりと微笑んだ。

「ここ、よく来るの。落ち着くでしょ？まあお店を経営しているのはミュータントみたいだけど」

「ねえ、聞きたい事があるの」

シェリルが堪えきれず、そう切り出すと、サラはシェリルの柔らかい口元に指先を持ってゆき、首を振った。

「その前に私の質問、先にいい？」

「…何？」

注文にきたウェイターに水でいいと断ったサラを不審に思いながらも、サラは紅茶を頼み、言葉を途中で止められたのが気に食わない表情で彼女の言葉を待つ。

サラは緩慢的な動作で水に口をつけ、静かに息を吐いて言葉を続けた。

「あなた、古の種族でしょ」

シェリルは何か反論しようかと口を開くものの、事実を尋ねられている為、これを否定すれば嘘になることを早々に理解し、抵抗するかのように意味をなさない言葉が少し口から漏れ、それはため息へと変わった。

彼女は何を考えているのか、不安が体中を駆け巡り、やっとの思いでシェリルはサラへと言葉を返した。

「それが何か？」

「やっぱりそう。あなたも伝えられた魔術師なのね！私実はあなたが魔法を使うところを見てしまったの。ねえ、教えて。どうしてあなたは術者であることを誇りに思わないの？」

「それは…」

シェリルは彼女の言葉に引っかかりを覚えて、しばらく適切な言葉を探すために口を閉じた。

サラはシェリルがこの世界で最後の魔女であることを知らない。エミリアの親族ではないと思っているのだ。それはシェリルにとって好都合でもあった。下手に知られて、自分までもブラックファイアに目をつけられては敵わない。彼女が急かしてくる前に、シェリルは答える。

「術を使うのが…怖いから…」

「怖いなんてことないわ、これは誇っていいのよ？古代文字を解読し、理解して、使役するっていうのは、とってもすごいことなのよ？」

少し体を乗り出して熱弁する彼女に、シェリルは納得する。

彼女は最近、魔術を操るようになったのだと。となれば、シェリルがする質問は一つだった。

「…すごいね、サラ。あなたは一体、誰に解読法を教わったのかしら？」

サラは一度、目を大きく見開いて言葉をとめる。そして突然落ち着いたように椅子に深く座り込むと、意外な一言を小さな声で返した。

「エミリア様から…教わったのよ」

四話

「嘘！」

シェリルは咄嗟に強く否定してしまい、一瞬口をつぐんで視線をさ迷わせる。エミリアの存在は魔法を扱うもの、ミュータントですら知っていることではあったが、こつも強く否定すれば疑われてしまわないかと不安になった。

だが想像していたよりサラの反応はあっさりとしたもので、ふふつ、と口元に笑みを作って髪をさらりと流している。

その反応に少し安堵しながらも、何故彼女がこんな見え透いた嘘をついたのかを考えた。エミリアは既にこの世にいない。そしてエミリア自身は血の繋がらない者には決して伝えようとはしなかった。それは彼女がいかに魔術の恐ろしさを知っていたかという証でもある。

エミリアをずっと側で見ていたシェリルなら分かることだった。

「確かにエミリア様から教わるなんて、私のような素質のある者にしかできないことよ？」

「お会いしたの？」

「ええ、先月。とても美しい方だった…崇高な魔術の前で、老衰なんて恐れることではないわね」

先月、シェリルはその言葉を頭の中で反芻した。

彼女の態度からして、先月エミリアという人物に魔術を教わったのは嘘ではないのだろう。

誰かがエミリアの名を語り、魔術を伝えている。

シェリルは今にも怒りで拳をテーブルに叩きつけたくなるのを堪え、静かな声を努めて尋ねる。

「何処でお会いしたの？」

「あら、随分と興味があるのね、力を恐れていたのではないの？」

「だっ…だからこそよ…お願い教えて、何処でエミリア様にお会いしたの？」

サラは空になった水のコップを傾げて、中の氷に視線を落とす。そしてなるべくシェリル以外の者が聞き取れないほどの声で告げた。

「実は…あなたを連れてくるように頼まれているの…あなたも素質があるのね、私が魔術を使える子がいるって言ったらそう言われたの…」

シェリルは青ざめ、席から急いで立ち上がった。急激に立ち上がった為、周りの客や、シェリルが頼んだ紅茶を持ってきたウェイターなどがシェリルに視線を送ったが、そんなことには目もくれず、シェリルは一言、帰る！とサラと突っぱねて店の外を目指す。もちろんそんなシェリルに驚いたサラは、彼女の腕を引いてそれを引き止めた。

「どっ、どうしたっていうの！イキナリ？！興味あったんじゃないかな？」

「お願い、離して、私そういう危なそうなの嫌なの、やっぱりやめる、帰るわ！」

彼女はやはり、騙されているのだ。

それも古の種族ではない、彼女が優劣を変えるべきだと罵ったミュータントに。

まだシェリルだと気づかれているわけではなさそうだが連れて行かれれば恐らく待っているのは罠、それもシェリル専用のどす黒い炎が取り巻く罠だろう。

シェリルはサラの手を強引に引き剥がし、お金を適当に置いて店を飛び出す。

数メートル走った所でサラが叫んだ。

「止まれ！止まらなないと魔法でアンタを丸焼きにするわよ！」

シェリルは足を止め、振り返る。

彼女の手には魔法陣が描かれている。初級も初級のその魔法にシェリルはつい冷たい笑みを浮かべてサラに向き合った。

「あなたは私を丸焼きになんて出来ないわよ、もうやめた方がいい。あのね、危険なのよ、魔法って。ミュータントがあなたを騙しているの、いい加減気づいて」

「何よ、たいした魔法も使えないくせに偉そうに…わたしはエミリア様に選ばれたの…もう悔やんだって遅いわよ！」

魔法陣が鈍く光を帯び、サラは詠唱呪文を唱える。

サラの腕から一筋の炎が噴出し、それは真っ直ぐシェリルに向かって凄まじい勢いで放たれた。

まだ魔術の全ての文字をその脳内に記憶していない為、うまく制御できてないその炎は不規則に揺れ、周りに居た通行人を巻き込み、人々は混乱して走り出す。

シェリルはこれ以上通行人までも巻き込まないためにも、炎を除けず、打ち消す反照魔法を唱えた。

その瞬間、サラが放出した魔法は一瞬にして掻き消え、サラの手の紋章は淡い粒となって弾ける。サラはそれに驚き小さく悲鳴を上げ、数歩後ずさり、とん、と何者かに背中がぶつかり、尻餅をつく。

シエリルはサラがぶつかつた人物の姿に息を飲み、思わず後ずさる。身長が高い男と思しきフードの人物が、じつとりとサラを見下ろしていた。

「な…に今の…！なんなのよ！」

「こんな街中でアホか、この女」

ぐっ、とサラの髪を掴むと男はサラに指先を突きつける。すると指先は一本のナイフに形状を変化させ、サラは悲鳴を上げてフードの男の顔を見上げる。

「俺たちにはきつたねえ魔族を滅ぼす権限がある、お前、餌につかつた人間か…残念だったな、こんなきたねえ魔術覚えさせられてシネッ！って言われてるようなもんだよなア！」

「やめっ…！」

男が形状変化させたナイフがサラの喉元を掻き切る。鮮血が虹のように柔らかな弧を描き飛び散り、サラはその場に倒れこんで事切れた。

シエリルは口を押さえブラックファイアの男を見つめ、脳内における男に対抗できる魔術を探す。

だが男はサラの死体を回収すると、シエリルの脇を過ぎ去り何事もなかったように街は再び喧騒を取り戻す。

サラの血が広がる街路を見つめて人々は囁きあつた。

「古の種族がブラックファイアに…」

「粛清つてやつだろ、怖いな…俺たちは人間でよかった」

「ああ、ミュータントに古の種族の小競り合いなんて化け物のいがみ合いみたいなもんだろ…」

囁く人々の声を遮断するように両の耳を押さえてシェリルは叫ぶ。

自分が煽ったりしなければともう遅い自責が繰り返しシェリルを苛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7619v/>

Last witch

2011年11月19日21時42分発行